

蝶の博物詩

生態10

蝶と花4



クロアゲハとヒガンバナ
(2001年9月23日 鎌倉)

photo by

Nishiyama



オオウラギンスジヒョウモンとアザミ
(1996年8月1日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態10

蝶と花4

鎌倉鶴岡八幡宮の段葛、参道の桜が散り、葉の緑が濃くなる頃、桜の樹間を埋めるツツジの花が徐々に目立ってくる。通学途中の子どもたちが花片の下から蜜を吸いながら歩き、その間を、負けじとアゲハチョウ類が飛び交っていた。

ツツジの種類は多いが、中でもヤマツツジ、オオムラサキツツジの蜜が蝶の好物で、平地ではクロアゲハ、山地ではカラスアゲハ、オナガアゲハ、ミヤマカラスアゲハなど黒いアゲハ類がやってくる。漏斗状のツツジの花の蜜源は深く、口吻の長いアゲハチョウ類でないと届かないのだ。長い口吻は飛行中ゼンマイのように巻かれており、花の直前で伸び、止まるときには中折れの長い管になっているのが写真で見るとよくわかる。

余談であるが、スズメガの仲間はツキミソウやユウガオなど長い筒状の花を好み、空中に静止して長い口吻を伸ばして蜜を吸う。マダガスカル島には筒型の花をしたランが多く、花の深さは20 cm、口吻の長さ20 cmほどのスズメガの存在が知られていた。1891年に熱帯博物学者として有名なA.R.Wallaceが30 cm以上の花筒のランを発見し、口吻の長さがそれ以上のスズメガの存在を予告し、十数年後に本当に発見されたという有名な話がある。このスズメガは“*predicata*”（予測された）と命名されたというが、最近話題となった太陽系第9惑星の存在と相通じる。

二十数年前、庭の一隅にツツジを植えた。毎年大きな花をつけるが、蝶はまったく来ない。戦前、箱根の小涌谷で無数の黒いアゲハ類がツツジに群れていたのは幻想だったかもしれない。

初夏から草原を色取るアザミの類はヒョウモンチョウの仲間をはじめ、各種の蝶のもっとも好きな花といえる。頭状花の上を歩き廻りながら蜜を吸う蝶は翅よりは胴体に花粉をつけて媒介する。

開花の時期はまったく違うが、ヒガンバナにも多数のアゲハ類が来る。かつて清流で有名な四万十川の堤みに近い田の畦で、燃えるような赤いヒガンバナの群落をみた。ここでアゲハチョウ、クロアゲハのほかナガサキアゲハが吸蜜に集まっていた。狂喜のあまり同行の家内が土手からころげ落ちたがカメラを離さなかった。

翌年、友人から球根をもらって庭に植えたところ、数年後から徐々に増え、小路を挟んで隣接する我が家の墓地にも自然に現われた。ヒガンバナはシビトバナとも呼ばれ、土葬の墓地に植えられ、鱗茎に含まれるリコリンという毒物により、ネズミやモグラに墓の荒らされるのを防いでいた。レンゲツツジも神経毒を含み、花片の蜜を吸わないほうがいいといわれる。

西山茂夫